

P-090

医療的ケア児の在宅生活を支援する訪問看護師と相談支援専門員のアセスメントの比較

深谷 由美¹⁾、岡田 摩理¹⁾、森田 一三¹⁾、松田 優子²⁾、竹村 淳子³⁾、泊 祐子⁴⁾¹⁾日本赤十字豊田看護大学、²⁾名古屋英大学 健康科学部看護学科、³⁾滋賀県立大学人間看護学研究所、⁴⁾大阪医科薬科大学

【目的】医療的ケア児（以下、医ケア児）と家族の在宅生活を支援する際に行うアセスメントについて訪問看護師と相談支援専門員で重視や困難の程度に違いがあるかを探索する。【方法】対象：全国の政令指定都市と特別区の小児慢性特定疾患指定訪問看護事業所2,812件の訪問看護師と、自治体に障害児支援を登録している相談支援事業所2,507件の相談支援専門員のうち、医ケア児の支援経験のある者。方法：対象事業所に研究説明文書を郵送し、管理者承諾の上、施設内への掲示または回覧を依頼した。同意した場合はQRコードを読み取りWeb上で質問紙へ回答するよう依頼した。質問項目は、属性と、医ケア児支援のためのアセスメントに関する25項目について重視と困難の程度を4件法で回答を依頼した。分析は、属性の単純集計と職種間の比較としてMann-Whitney U検定を行った。倫理的配慮：研究者の所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得た。【結果】375件の回答のうち、医ケア児支援の未経験者を除外し、訪問看護師172件、相談支援専門員164件を分析対象とした。回答者の経験年数の平均値（標準偏差）は、訪問看護師が22.4（±9.22）年、相談支援専門員は7.23（±4.17）年、医ケア児支援経験人数の平均は、訪問看護師が20.3（±50.9）人、相談支援専門員は7.9（±12.7）人であった。重視の程度で、訪問看護師が相談支援専門員より有意に高かったのは「医療的ケアの具体的な実施方法や注意点」、「排泄の状況」、「病気や治療の内容と経過」、「身体状況（体調や病状）変化の見通し」など身体的側面に関する項目や「親の生活スタイル」、「家族内の役割分担や関係性」など家庭環境に関する項目など15項目であり、相談支援専門員が有意に高かったのは「サービスを提供する施設の対応状況」の1項目で児に関わる施設の状況であった。困難の程度では「医師の指示内容」の1項目で相談支援専門員が有意に高かった。【考察】訪問看護師は、医療的ケアの実施状況、身体状況など医療的な視点や家族に関するアセスメントを重視しており、相談支援専門員は施設の対応状況などサービス調整の視点でのアセスメントを重視していた。相談支援専門員は医師の指示内容について困難を感じていることから看護師が解釈と説明をすることが必要である。そして専門職が異なる視点でアセスメントすることでお互い補いながら医ケア児の支援をしていることが明らかとなった。

P-091

医療的ケア児の在宅生活を支援する訪問看護師と相談支援専門員がアセスメント時に注意および大事にしていること

松田 優子¹⁾、岡田 摩理²⁾、深谷 由美²⁾、森田 一三²⁾、竹村 淳子³⁾、泊 祐子⁴⁾¹⁾名古屋英大学 健康科学部看護学科、²⁾日本赤十字豊田看護大学、³⁾滋賀県立大学人間看護学研究所、⁴⁾大阪医科薬科大学

【目的】

医療的ケア児（以下、医ケア児）と家族の在宅生活支援のアセスメント時に訪問看護師と相談支援専門員それぞれが注意および大事にしていることを明らかにする。

【方法】

対象：全国の政令指定都市および特別区の小児慢性特定疾患指定訪問看護事業所2,812件の訪問看護師と、自治体に障害児支援を登録している相談支援事業所2,507件の相談支援専門員のうち、医ケア児の支援経験のある者。

方法：対象事業所に研究説明文書を郵送し、管理者承諾の上で、施設内への掲示または回覧を依頼した。同意した場合はQRコードを読み取りWeb上で質問紙へ回答を依頼した。属性やアセスメント項目への質問の後に、「アセスメントを行う上で、特に注意していることや大事にしていること」について自由記述を依頼した。記述内容を質的記述的に分析し、カテゴリー化した。

倫理的配慮：研究者の所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

回収375件のうち、訪問看護師101件、相談支援専門員121件の自由記述があった。

【医療的ケア児の身体的側面】では、現在の身体状態の細やかな観察や、早期発見のための予防的観察が行われていたが、両者とも普段との違いを察知することを大事にしていた。看護師は看護の専門的な知識を活用していたが、相談支援専門員は医療職の情報やアセスメントを参考にし、医療職間で相違がある場合は戸惑いを感じていた。

【医療的ケア児の特徴】では、両者とも成長発達の状態や児の個性や特性を把握することを心掛けていたが、相談支援専門員は本人の気持ちを把握することを特に大事にしていた。

【家族および主介護者の状況】では、両者とも家族全体の生活状況を把握し、親の心身の健康状態や生活の負担度、関係性、家族の力量などの把握に注意していた。家族の思いや考えの把握は両者とも大事にしていたが、相談支援専門員は看護師の約3倍の記述があった。

連携に関しては、関わる施設との関係性やチームとしての把握がされており、多職種連携の重要性が認識されていた。

支援の基盤となる心掛けでは、子どもや家族を第一に考えることや、気持ちに寄り添う関係づくり、丁寧なコミュニケーションが特に大事にされていた。

【考察】

両者とも注意および大事にしている点は概ね共通していたが、看護師は心身の把握からの将来予測を立てており、相談支援専門員は本人や家族の意向を中心に将来の生活を見据えていた。